審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　大内田史郎

本論文は 1914(大正 3)年に竣工した東京駅丸ノ内本屋(1908-1914)の意匠と技術について建築史的な視点から調査･研究したものである。

東京駅丸ノ内本屋は、第二次世界大戦(1939-1945)後の戦災復興工事(1945-1947)を経て、一昨年に開業 90 周年を迎えた。そして、2010 年には、現存する部位を可能な限り保存しつつ、外観および南北ドーム（八角広室）の内観（を創建時の姿に復原する、「保存･復原計画」が進められている。

創建時の丸ノ内本屋の意匠に関しては、未だに明らかになっていない部分も存在している。また、それらの意匠を可能にしていた技術に関しても、その全貌は明らかになっておらず、丸ノ内本屋に用いられていた意匠や技術の建築史的な位置付けや、それらが後の我が国の建築界に与えた影響等、丸ノ内本屋の意匠や技術の建築史的意義についても明確になっていない状況である。

さらに、丸ノ内本屋の歴史的変遷に関してみてみると、戦災復興工事については、松本延太郎(1910-2002)による手記（『東京駅戦災復興工事の想い出』(1991)）が残されているが、戦前ならびに戦災復興工事以後の改修工事等の事柄については、基本的には一部の主な事柄のみが繰り返し述べられているものであり、事柄が一部欠落している。

本研究の目的は、丸ノ内本屋の「保存･復原計画」において、意匠上とくに重要な部位となる外壁、屋根およびドーム内観に着目して、丸ノ内本屋の意匠や技術を解明しつつ、丸ノ内本屋の建築史的意義を明確すること、さらには、丸ノ内本屋の歴史的変遷を再整理することにある。研究の主題は大別すると次の３点である。

(1) 丸ノ内本屋の意匠と技術を明らかにし、「保存･復原計画」の基礎資料とする。

(2) 丸ノ内本屋の建築史的意義を明確にする。

(3) 丸ノ内本屋の歴史的変遷を再整理し、正確な記録の保存に寄与する。

本論文の構成は、序論（第１章)、本論（第２章～第６章）および結論（第７章）と、付論（第８章）からなる。

第１章 序論

丸ノ内本屋の意匠と技術に関する建築史的研究の動向について、現時点におけるレヴューを行い、研究の目的および研究の対象･方法について明確にする。

第２章 帯形からみた丸ノ内本屋の意匠に関する研究

辰野は赤煉瓦と白色の帯形や隅石・付柱の対比による、いわゆる「辰野式」の作品を数多く設計していったが、「辰野式」の定義、およびその位置付けを明らかにし、丸ノ内本屋の建築史的意義を明確にする。

第３章 丸ノ内本屋の外壁材料の技術に関する研究

丸ノ内本屋の外壁を構成する化粧煉瓦・花崗岩・擬石塗の建築史的な位置付けや、それらが後の建築界に与えた影響について、史料を分析した上で当時の仕様との比較検証を行い、その意匠や技術を明らかにすることを試みる。

第４章 丸ノ内本屋の天然スレートの意匠と技術に関する研究

創建時の丸ノ内本屋の屋根部を構成する材料のうち、最も大きな割合を占める天然スレートの意匠や技術について、史料を分析した上で当時の仕様との比較検証を行い、その意匠や技術を明らかにすることを試みる。

第５章 丸ノ内本屋のドーム内観の意匠と技術に関する研究

創建時の丸ノ内本屋ドーム内観はとくに特徴的な部分の一つであり、様々な装飾が施されていた。そこで、創建時の丸ノ内本屋のドーム内観について、史料を分析した上で当時の仕様との比較検証を行い、その意匠や技術を明らかにする。

第６章 丸ノ内本屋の歴史的変遷に関する研究

丸ノ内本屋の歴史的変遷について、既往の研究における整理の一元化を行うとともに、新たに判明した事柄の内容や時期等の歴史考証を行い、丸ノ内本屋の歴史的変遷を再整理する。

第７章 結論

上記の各章において得られた知見に基づき、全体のまとめを行うとともに、「保存・復原計画」の実施における今後の課題についても言及する。

第８章 (付論)丸ノ内本屋に関する史料の検証

丸ノ内本屋ならびに辰野金吾に関する、古写真や文献、図面等の各種史料について、既存の史料を再整理する。これは今後の丸ノ内本屋の「保存・復原計画」や、辰野に関する研究等に大いに活用が可能なものである。

こうした点を明らかにした本論文は近代建築史研究の成果として極めて有益なものであり、これら分野の発展に資するところが大きい。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。